

地元に戻ろう かぐや姫

《01 ベッドのヒトミ、吹き出しに電話する紗耶香》

都会で暮らしている一人娘から、就職の相談電話があったその夜、ヒトミさんは夢を見ました。

《02 ケーキの街》

ヒトミ「早いなあ。ついこの前、進学したばかりだと思っただのにもう就職の心配か。昔はパティシエになるとか言って、よくお菓子を作ってたのに。夢はあきらめたのかしら。一流の店では修行させてもらうにも、実績が必要な時代なのね。競争の厳しい世界だもんねえ。でももし、憧れの店に入れたとしても、自分の好きな仕事をさせてもらえるとは限らないし。芽が出るまで何年も下働きをしなければならぬかもしれないし。そうよねえ、きっと企業に勤めたほうが無難よねえ。」

《03 砂漠の道にらくだのウータンとだらず様》

洋菓子の街を抜けると、砂丘の中の不思議な一本道に出ました。空には不思議な月が出ています。

ヒトミ「あれ？月じゃないわ。地球？どっか違うな・・・？」

すみません、あの～、ここはどこでしょうか？道に迷ってしまっ

だらず様「迷った人を助けるのが私の務めです。ご一緒にたし

ししましょう。ちょうど、かぐや姫を迎えに行くところです」

ヒトミ「かぐや姫？」

《04 電車の中のかぐや姫》

ヒトミ「あれ？沙也加！あのかぐや姫は、うちの娘にそっくり

りなんですけど」

だらず様「姫は、学生なのですが、もうすぐ卒業です」

ヒトミ「そう、そう。沙也加もそうなんです。」

だらず様「姫はこの町に夢を探しにやってきて、慣れない一人

暮らしをしながら一生懸命がんばりました。」

ヒトミ「はい」

だらず様「でも、なかなか夢はみつかりませんでした。そろ

そろタイムアップです。」

ヒトミ「はあ…。今、就職で悩んでいるみたいで」

だらず様「姫はこの町に残りたいと思う反面、地元に戻りた

いとも思っています」

ヒトミ「え！そうなんですか？」

《05 ちがうアングル》

だ「でも、地元にもどるのは、都会で頑張ってきた事が全部無駄になるようで、悔しくもあるし、わがままを聞いて都会に出してくれた両親に悪くて、なかなか言い出せないのです。」

ヒトミ「そんなことはないと思います。頑張ったことが大切でしょ？その分、成長してると思うし、無駄だったなんて・・・」
だらず様「でも、反面、姫が夢をあきらめてしまうのも寂しい」

ヒトミ「そう・・・、そうなんです。もう少し頑張ってほしい。だって、才能あるんです。すごく美味しいんですよ！あの子のケーキ！そりゃ見た目はまだまだだけど。でもそれは、経験を積みばあの子はきっと・・・！」

《06 迷路》

だらず様「道を選ぶのは、本人です」

ヒトミ「そうです。それは…わかっています。理想と現実をちゃんと踏まえて考えている。成長したんだって思います。」

だらず様「道を選ぶのは本人ですが、応援することはできます」

ヒトミ「応援してます。いつだって！でも…」

だらず様「どうしていいのかわからない。」

ヒトミ「そうです。私はどうしたらいいんでしょう？」

だらず様「あなたにできることはなんですか？姫と一緒に悩んだり、道に迷うこともできますが、道を探すこともできますよ。その方がが応援になると思いませんか？」

母「え？」

《07 駅前サティ》

朝になると、不思議な夢を見たことはすっかり忘れていたヒトミさんでしたが、娘の就職のことが頭を離れません。

駅前の大型スーパーで、買い物をしようとエレベータに乗った時のことです。ぼんやりして別の階で降りてしまいました。

ヒトミ「いけない、ここは4階じゃない・・・初めて降りたかも。」

《08 県立ハローワーク》

「県立のハローワークか…。相談に乗ってくれるかなあ。母親が娘の就職先を探すのってアリかしら。それとも本人じゃないとダメかなあ。」入ろうか入るまいか、入口で悩むヒトミさんでしたが、「そうだ、夢の中で言ってたな。道を探すことが応援になるって・・・」

《09 相談員とヒトミさん》

勇気を出して切り出すと、相談員さんが丁寧に対応してくれました。もちろん、ヒトミさん自身の事ではなくてもオッケーで、娘の沙也加さんの立場になっていろいろ情報を探してくれました。残念なことに、見習いのパティシエを応募している洋菓子屋さんはありませんでしたが、地元では有名なホテルが従業員を募集していました。

「そういえば、そのホテル、私も披露宴に呼ばれて行ったこ

とがあります。料理がとっても美味しかったし、そうだ、たしかデザートもすっごく上品で…。もしかしたら、厨房で働かせてもらえるかもしれないし、お菓子を作るチャンスだって、きっと…！ありがとうございます、ぜひ沙也加に伝えます。今度帰郷したら、本人を連れてきます。いろいろ教えてやってください！」

《10 ホテルでケーキを食べるだらず様》

これがきっかけとなり、沙也加さんは地元のホテルに就職することになりました。最初の数年はいろいろな仕事で下積み経験をしましたが、やがて念願の厨房で働くことになると、めきめき頭角をあらわし、とうとうデザート部門を任されるようになりました。いまでは沙也加さんが考案したスイーツが、ホテルの名物になって、たくさんの人が押し掛けるようになりましたとさ。めでたし、めでたし。